

博物館の展示とアメリカ・インディアン

青柳 清孝¹⁾

要約

伝統ある自然史博物館のアメリカ・インディアンに関する展示は、諸種集団文化の尊敬を強調する近年の多文化主義思想の影響を受け、修正を迫られてきた。その状況をシカゴ自然史博物館とカーネギー自然史博物館を対象に考察する。一方、最新のアメリカ・インディアン国立博物館の展示はどうであろうか。これら3博物館は諸部族から顧問を招致し、彼らの意見を尊重し、より良い展示の在り方を模索してきた。しかしまだ多くの課題が残されているように思われる。

Museum Exhibit and American Indian

In the face of multiculturalism with its emphasis on understanding and mutual respect for different cultures, the way of exhibiting American Indian artifacts in museums of natural history has been questioned, necessitating many changes. I visited the Chicago Field Museum of Natural History and the Pittsburgh Carnegie Museum of Natural History to observe the changes. I also visited the newly established National Museum of the American Indian in New York which claims to have avoided past faults. While it is indeed true that many improvements have been

made through the help of invited tribal consultants and a receptive attitude on the part of museums, it seems that many problems remain to be solved.

Kiyotaka Aoyagi

はじめに

ここ10数年来アメリカにおいて、博物館の在り方が問題視されるようになってきた。すなわち、博物館の従来の展示の仕方では、文化が静

止したものとなってしまう：展示される側の声を無視してきた：対象とする文化に対する尊厳やその秘儀性などを充分考慮することなく展示をおこなってきた：博物館が果たす役割のうえで、地域社会との関係を充分考慮してこなかったなどである。これらの指摘の多くはまさにアメリカ・インディアンに関する展示にあてはまるものであった。

この報告では、博物館によるアメリカ・インディアンの儀礼用具や日常工芸品の展示について、どのような事が問題として重要視されてきたかということを紹介したい。考察の対象となる博物館は、私が実際に訪問したことのあるシカゴ・フィールド自然史博物館、ピッツバーグのカーネギー自然史博物館、そしてニューヨークにあるアメリカ・インディアン国立博物館の3つである。

長い間、公共に知的奉仕をしてきたシカゴやピッツバーグの自然史博物館は、実はアメリカ・インディアンのイメージづくりに大いに関わってきた。そして今、これらの自然史博物館はアメリカ・インディアンの展示に関して大きく変わろうとしている。一方、アメリカ・インディアン国立博物館は、従来のステロタイプから脱し、ネイティブ・アメリカンの声を運営に反映させることを目的として、1994年に開設された。

これら3つの博物館の考察を次のように構成しその内容を紹介し、最後に筆者が近い将来取り組みたい課題を述べておきたい。

1. シカゴ自然史フィールド博物館

- a) ポウニーの‘明けの明星に対するいけにえ’をめぐる
- b) 人骨類の返還

2. カーネギー自然史博物館

1) 京都文教大学人間学部文化人類学科・前教授 現非常勤講師

- a) カチーナの展示
 - b) 神聖なパイプの展示
 - c) バッファローの展示
 - d) 都市のインディアン
3. アメリカ・インディアン国立博物館
- a) スミソニアン協会の前身=科学振興全
国協会
 - b) ワシントン珍物博物館の吸収
 - c) 平原インディアンのシャツ
 - d) 揺りかご
 - e) モカシン
4. 解決を求められている問題

1. シカゴ自然史フィールド博物館 (Field Museum of Natural History)

自然史博物館と称する博物館で全国的に有名なものは、ワシントンのスミソニアン協会自然史博物館、シカゴのフィールド自然史博物館やピッツバーグのカーネギー自然史博物館といえるだろう。これらの自然史博物館は動植物類と並んで先住民関係の展示が用意されているのが大きな特徴である。

シカゴのフィールド博物館展示の基礎をなしたのは、1893年に同市で開催されたコロンブス万国博覧会¹⁾のために集められた動植物および人類学的収集品である。博物館の名称もシカゴ・コロンブス博物館であった。その後、世界諸地域探検の際に入手したとか、交換・購入あるいは寄贈を受けることによって、現在では2000万点以上の収蔵品を数えるに至っている。博物館が現在の名称に変更されたのは1905年で、博物館にとっての最初の篤志家マーシャル・フィールド(Marshall Field)²⁾に敬意を表すことにしたのである。

スミソニアンは勿論、フィールドにしてもカーネギーにしても、これら自然史の博物館に動植物とヒトという組合せがみられるのは、『自然史の本質』に書かれたマーストン・ベイツ(Marston Bates)の言葉から理解できるであろう。

「生命の多様性は驚くほどだ。およそ百万を数える生きた動物と数百万という種類の植物が

存在している。

しかし私たちは世界中のものをことごとく考える必要はない。ちょっと立ち止まって森や牧場を、草や木々や毛虫や鷹や鹿を眺めるだけで驚異を感じる。どのようにしてこれら種々の物すべてが生ずるようになったのだろうか。如何なる力がそれらの数を維持し、それらの残存あるいは根絶を決定するのだろうか。それらお互いの関係やそれらが生きている物理的環境との関係は何なのであろうか。

これらは自然史の諸問題であり、動物としての私たち自身、そしてそれ以上にこの文明と呼ばれているものの発明者としての私たちにかかわる問題なのである。文明はつまるところ、単に、かなり特別な種類の動物的コミュニティである。」

(これは、シカゴのフィールド自然史博物館の隔年報告書「多様性の理解」(1989/1990号からの引用)

この隔年報告書の序文執筆者ロバート・A・プリツカー(Robert A. Prizker、シカゴ自然史博物館理事長)は、「博物館は分類学と文化理解が一緒になっておよそのところ出来上がる制度である。その分類と理解に介在するのが我々の行なう種類の調査研究と我々の教育的作業を支配するエトスである」と述べた後で、フィールド博物館が基本科学・環境教育・人間関係において特別の役割を果たすものと強調している。

(Prizker-Introduction, p.2)

このフィールド博物館の一階部分にはネイティヴ・アメリカン・ホールと称する大きな空間があつて、数多くしかも見事なネイティヴ・アメリカンの物質文化が展示されている。この博物館に限らず恐らく博物館はどこでも、ここ数年、展示の適切性と収集品の扱いについては最大限の注意を払うようになった。フィールド博物館でも、現在の展示は、インディアン諸族に助言を求めて構成されたものといわれる。もはや“珍奇”とか“未開”に対する興味本位の立場から展示を行なう時代は過ぎ去つたのである。一言で言えば、ネイティヴ・アメリカンの立場が尊重され、それを博物館が受け入れたからということである。

a) ポウニーの‘明けの明星に対するいけにえ’をめぐる

しかしながら、それで問題が解決されたとは言えないとこの隔年報告書は指摘している。それは、参観者がある特定の展示をどう解釈するかという点で、場合によっては博物館がかなり微妙な判断を迫られるということにもなる。フィールド博物館でこんな問題が起こったという。ポウニーの‘明けの明星に対するいけにえ’を映すジオラマは、部族の決まりによって、その対象となる女性を近隣部族から拉致するという物語を伝える。これについて、ある女性観客はそれが女性に対する暴力であり、人種主義的であり性差別主義的であり、そのジオラマを撤去するようにという抗議文を博物館に送ってきた。

博物館側はその抗議文を公開し、参観者から広く意見を求めることに決定した。およそ4,500人がその依頼に応じてきた。反応の大方は、歴史は書き替えられない、異なる文化的規範を描写するのが人類学的展示の基本だとするものであった。当のポウニー部族は部族会議において、いけにえのため女性を拉致するというのは誇らしいことではないが、歴史的事実なのだから、そのまま続けるべきだとした。この判断を受けて博物館側はこのジオラマを続行することになった。(Prizker, p.41)

この例は、少なくとも展示物提供者(ネイティブ・アメリカン)と博物館と参観者の三者にとって適切性とは何かは今後も議論されるだろうことを予測させるのである。

b) 人骨類の部族返還

さて、フィールド自然史博物館にはネイティブ・アメリカンの物質文化だけでなく、彼らの骨も過去にいろいろな経緯で集められている。アメリカ人類学の祖といわれるフランツ・ボアーズのような人類学者から購入したもの、建設現場から運び込まれたもの、19世紀の墓地盗掘によるもの、連邦政府指導による研究用頭骨収集の結果として加えられたものなどが数え上げられる。それらの多くは顎とか頭骨だけなどと、ばらばらの状態である。

最近次のような事実が明るみに出た。同館3階の引き出しにネイティブ・アメリカン約2,000人分の人骨が眠っていたのである。博物館“墓場”に人骨が数多く保管されていたのである。これらの遺骨に対する尊敬心から傍に近付かないように館員は指示されていたという。そのためであろう、それほど多くの人骨が保管されていることが周知されていなかったらしい。1990年の『ネイティブ・アメリカン墓地保護・返還法』(Native American Graves Protection and Repatriation Act=NAGPRA)³⁾の成立過程に関わった同館長すら、それらの人骨はすでに返還されたと思っていたという。『ネイティブ・アメリカン墓地保護・返還法』によって返還の対象とされたものは、人骨、副葬品、共同体所有財産、祭儀・宗教対象物、不法に入手された物、また(返還の要求があれば、複製品または同一種類で数多くあるものとされている。同法の成立には、1980年代中葉ノーザン・シャイアン出身の職員がスミソニアン協会に18,000の遺骨が保管されているのを知り、それがきっかけで返還運動へと発展したという背景があった。『ネイティブ・アメリカン墓地保護・返還法』施行以来今日まで10年余が経過したにも拘らず、フィールド博物館の場合、部族から返還要求のあった数はほんのわずかであった。ちなみに全国の博物館・研究所・大学などからの返還率は10%程度という。所属不明の遺骨、返還予算の不足、事務的手続きの遅れなどが返還を遅滞させている。フィールド博物館の場合、館長によれば、1,100以上は現存部族との関係が辿れるが、800は所属不明のものであるか、もしくは現存部族と関係ないものである。また同博物館の場合、部族所属が不明の人骨についてその扱いをどうするかははっきりした方針がまだ出ていないという。(Groark April 30, 2000)

一方、返還法が成立したことで新たな問題を抱え込む部族もあらわれた。人骨が返還されても再埋葬の儀礼を持たない部族は、それをどう扱うべきかという問題に直面する。例えば、アリゾナのナヴァホには再埋葬の儀礼がないし、死者を扱うことは病気や不運を引き起こす主な

原因という部族信仰があるため、今のところ返還を求めている。

返還の対象として考慮されたのは人骨だけではない。ナヴァホはシカゴのフィールド博物館に保存されている“神聖な包み”などの儀礼対象物を問題にしている。それには2つの医療バンドル (medicine bundle) も含まれていて、それはナイトウエイ・セレモニー用のものである。このセレモニーは詠唱歌を伴う成人式の際の儀式である。(Kluckhohn & Leighton p.145) ナヴァホ部族とフィールド博物館は数年に亘りその所属をめぐる意見を交わしてきたが、同意に至らなかった。博物館はこれらを購入したものであるとしているが、ナヴァホはこれらの売却は文化的慣行に反する行為であり、博物館の購入は議論の余地あるものだったとしたのである。今のところ博物館は、あくまでもその所有権は博物館側にあるとする立場を崩していない。ナヴァホ側が博物館の所有権を認めれば、博物館はそれをナヴァホに返還するという妥協案を示したがナヴァホ側はそれは認められないという。

一方ポウニーの“神聖な包み”の場合は、彼らの内部で意見の同意がみられるまで、フィールド自然史博物館で保存して欲しいということになった。その“神聖な包み”には、矢および平和のパイプのようなものが含まれている。それらは1800年代と1900年代初期に使用されたものであるが、当時の人々が知識を伝えないまま死んでしまった今、どういう性質のものか分からなくなっている。ある人々は返還を希望しているが、他の人々は返還されると何か良くないことが部族に起こると信じており、そのまま博物館に置くことを希望している。

さらに、同じ部族内ではなく、親集団とそれから分離した集団間の問題として返還の決着がつかない場合もでてきている。イロコイ連合に属するニューヨークのオネイダと、この部族から別れて移動したウイスコンシンのオネイダの間で、現在フィールド自然史博物館に所蔵されている18世紀に作られたワムパム (wampum) の返還をめぐる対立がある。ワムパムとは、は

まぐりの一種の貝殻を材料にビーズを作り、それをつなぎ合わせて作ったベルト状のもので、貨幣代わりに用いられた。(Underhill, p.68,73)

問題のワムパムは、米国独立戦争後、イロコイ部族連合再統合を祝してニューヨークで作られた特別のものらしい。まずニューヨーク・オネイダがその返還を求めた。これに対してウイスコンシン・オネイダの一部は、そのベルトの保持者である首長がウイスコンシンに持ってきたものであるとして反対している。そこでフィールド自然史博物館は両者の意見が纏るまでそれを預かることに同意した。(Groark, April 30, 2000)

ウイスコンシン・オネイダは分離集団といっても、ニューヨーク・オネイダに従属するわけではない。ウイスコンシンに本拠を置く独立の部族と考えるべきであろう。ひとつ部族が複数に分離された例は他にもあり、所有権をめぐる類似した問題が起こる可能性は他にもあり得るであろう。

2. カーネギー自然史博物館

(Carnegie Museum of Natural History)

ピッツバーグにあるカーネギー自然史博物館を私が訪れたのは1999年9月であった。この博物館の資料収集は、1901年以来40回以上の極北探険が出发点になっている。1938年にはJ. ケネス・ダウト (Kenneth J. Doult) とアーサー・C. ソーミー (Arthur C. Soumie) がエスキモーの考古学・民族学調査を開始した。この極北探険にはじまる長年の実績があつて、「極北の世界」の部門にみられるイヌイットの展示は全米第一の規模のものになったといわれる。

幸いなことに、人類学部門担当のリチャードソン氏 (James B. Richardson, III, curator, section of Anthropology) が新しく設けられた「アメリカン・インディアン・ホール」を案内してくれた。この博物館が所蔵する収集品の数は夥しい。今回の展示物はごく一部を除けば既存の収集品から選ばれたものという。

カーネギーの場合は、展示企画にあたって顧問という資格で複数の部族から30人にのぼる人

びとを招いた。そのなかには、12人のホピと年配のラコタ（特に女性）が加わっていた。特に、ホピのハートマン・ローマワイマ氏（Hartman H. Lomawaima, Hopi, Associate of Arizona State Museum, アリゾナ州立博物館副館長）は顧問のひとりとしてホピの展示について、うまく調整の役を果たしてくれたという。30人の顧問は、いづれも知り合いとか‘つて’によって依頼された人びとである。ホピの顧問参加が多いのは、そうした‘つて’によるものらしい。ピッツバーグ大学には、ホピ研究の専門家でリチャードソン氏の友人であった研究者（故人）がいたともいう。

アメリカン・インディアン・ホールそのものはジャック・ロバン（Jack Robin）の弟子がデザインした。ホールは5つの文化グループの空間からなっているが、それぞれの空間は自然環境のコントラストを見せる。各空間によって異なる自然環境と人々の生活の様態の変化が鮮やかに観る者の印象に残る。

「極北の世界」から始まり、北西部の「トリソギット」、「ホピ」、「ラコタ」、「イロコイ」を経て「都市の生活」で完結する。生業の特徴が重視されてこれらの部族が選ばれたとリチャードソン氏は説明している。南東部のインディアンに関しては所蔵資料が無いので展示空間を設けていない。

a) カチーナの展示

彼ら顧問の意見に従って博物館側が特別に注意を払ったのは、カチーナの展示と神聖なパイプの展示であった。ホピのカチーナ儀礼は多くのアメリカ人が知っているかなり有名な儀礼であると言えよう。南西部は乾燥地帯で、そこに住むホピは洪水を利用し、灌漑用水によって農耕を営む。とうもろこし、豆類、スクオッシュなどを栽培している。カチーナは、この地上に水と生命を齎らす力を持つと信じられている存在である。ホピの人びとは雨ごいの儀礼を行なうが、その儀礼にカチーナに変装した人びとが列を作って現われる。カチーナには、とうもろこしやスクオッシュと結びついたカチーナ、雲、雷雲を頭頂部に持つカチーナ、成長と再生

を支配するカチーナ、躑躅の悪い子供を矯正するためにコミュニティにやってくるカチーナなどさまざまなカチーナが存在する。それらのカチーナの木彫人形が博物館に展示されている。

リチャードソン氏は儀式を行なう時のようにカチーナを並べるという提案をしたが、それはあまりにも神聖であり、それを展示として再現するのは適切ではないと指摘されたため一列に並べることにしたという。博物館の一般観覧者は、色々なカチーナの姿形を楽しむことで満足しなけらばならないであろう。しかし、カチーナ儀式に限らずどこまで秘儀を公開するかは、博物館でも観覧者でもないのは明らかである。

b) 神聖なパイプの展示

神聖なパイプに関しては、火ざらと軸を離して展示してあるが、これはその両方を繋げるとは神聖となり、博物館にはふさわしくないという意見に従ったものであるという。

c) バッファローの展示

そのほか、バッファロー展示に関して博物館側のいわば安易な考えが顧問によって修正されるという一件であった。

一般人が身近かにバッファローを観察しようと思えば、絶滅寸前のバッファローを保護したイエローストン公園のようなところに行かなければならない。平原インディアンにとってバッファローが食料はじめ種々の生活資源として大切な動物であったことは大抵のアメリカ人なら知っている筈である。しかしバッファローは絶滅寸前まで追い込まれてしまった。それは、白人がバッファロー狩りをスポーツとして楽しみ大量に殺戮したことや、バッファローのなめし革に対する外界からの需要が増大したこと、さらにその需要を充たすことを容易にした交通・運輸手段の発達であった。それだけに一頭の剥製バッファローの展示の意味は大きい。

博物館側はバッファロー展示のため、西ベンシルヴァニア地域から一頭調達してくればよいと考えていた。しかしそれは平原部族にとってバッファローが重要な意味を持つことをあまりにも無視した考えであった。まず、調達の可否について呪医に判断を求めること、さらに実際

に屠殺することになった場合は儀式を行なう必要があると告げられた。呪医の判断は幸いなことに好意的であった。というの、西ペンシルヴァニア地域の群れのなかに、屠殺されることになっていたバッファローが一頭いたので、それが博物館に提供されることになったのである。

丁度この時期にイエローストーン国立公園のバッファローが農場に入ってきて困るという事態が生じていて、何頭ものバッファローが射殺されるという事件が起きていた。カーネギー博物館では一頭のバッファローを屠殺するのに然るべき手続きを踏んだということを知り、サウス・ダコタの人びとは大変よい印象を持ったという。

ところで、地元ピッツバーグのスリー・リヴァーズ・インディアンはその儀式を知らないで、ニューヨーク大学の人類学者に問い合せた。その結果サウス・ダコタからは儀式を主催する人が来ることになったが、折悪しく激しい雷雨のため来られなくなってしまった。急遽代理の女性がたてられ、彼女はサウス・ダコタの女性から儀式執行のやりかたを学び、無事役目を果たすことができたのである。

そのバッファローは今、キャンパスに描かれた草原を遠景にしたややゆとりある空間に展示されている。展示には次の解説があった。

展示：「バッファロー儀礼」

解説：バッファローは、遠い昔彼らの側から、人びとを養うという約束を申し出てくれた。バッファローのこの寛大な申し出でのお返しとして、人びとは部族の群れのバッファローが屠殺される時はいつでも、伝統的宗教指導者は特別の儀式を遂行することになった。これら霊的指導者は、タバコを供えかつ命を奪うことの謝罪を述べることで人びとがバッファローに対する尊敬を伝えるのである。(部族連合バイソン協同組合長マーク・ハカート, Mark Hackertの言)

これに続く解説の部分で、ラコタの霊的指導者ロザリー・リットル・サンダー (Rozalie Little Thunder)はペンシルヴァニアに招かれ、今ここに展示されているバッファローが屠殺場で屠殺される前に、上に説明されているような儀式を行なった。博物館はこのバッファローを屠殺される少

し前に購入した。この儀式において、さらに、ロザリー・リットル・サンダーはこの展示場において教育的目的のために犠牲にされるのだとバッファローの許しを求めたと述べている。

「アメリカン・インディアン・ホール」の展示品は一部を除き、カーネギー所蔵品の中から取り出されてきたものである。前述のように、南東部は所蔵品が欠如しているため展示はなく、イロコイについても所蔵品が限られている。例外として新たに購入したのは、ネヴァダのワショ・インディアンの小型の籠(バスケット)であったが、それはネヴァダ・タホ湖地域のワショ・インディアンの著名な製作者ダットソラリー (Datsolalee)によるものだけに、購入値段は驚くほど高かったとリチャードソン氏は述懐する。しかし過去に二束三文で購入したり、無断で入手してきたりしたことを思えば、今は先方が提案する値段で購入するしかないのではないかと彼はつけ加えた。

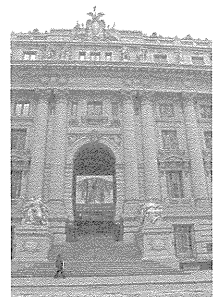
「ホピ」については、英語に加えてホピ語の解説が用意されている。

d) 都市のインディアン

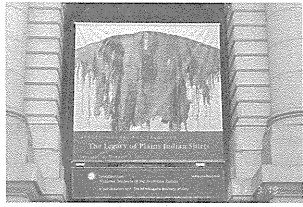
シカゴのフィールドや次に述べるアメリカ・インディアン国立博物館とカーネギーの大きな違いのひとつは、カーネギーには「都市の生活」があることである。生きた文化や生活を大切にすることが共通語のようにになっている現在、先住民の新しい生活文化を築く場となっている都市を加えたのは大きな貢献であろう。「都市の生活」は私に新鮮な驚きを与えた。

ネイティヴ・アメリカン総人口の半数を越えるひとびとが今や都市に居住している。⁴⁾ 「都市の生活」を提案したのは、ピッツバーグ地域のスリー・リヴァーズ・インディアンだと同部族のミッテン氏 (Lisa Mitten)が語っていた。

3. アメリカ・インディアン国立博物館 (National Museum of the American Indian)



連邦政府がアメリカ・インディアンに特化した博物館を推進する時代が到来した。1989年、



連邦議会はアメリカ・インディアン国立博物館法（公法101-185）⁵⁾を可決し、スミソニアン協会の下に3

つのアメリカ・インディアン国立博物館（NMAI）を設立することになった。場所はワシントンのモール、ニューヨーク・マンハッタンおよびメリーランド・シュートランドが予定された。メリーランドの場合は、文化資源センター（Cultural Resources Center-CRC）と称されることになった。

スミソニアン協会はこれまで人間生活の歴史を綴り、文明の達成を示すために、科学、芸術、産業など諸分野に及ぶ展示を行ってきた。そのため全部で15の博物館が設けられ、そのひとつ自然史博物館がアメリカ・インディアン関係の展示の場となってきた。

a) スミソニアン協会の前身＝科学振興全国協会

スミソニアン協会の前身は1840年に設立された科学振興全国協会（The National Institute of Promotion of Science）であった。それは英国人ジェイムズ・スミソン（James Smithson）が、知識の増加と普及を目的とした研究所をワシントンに創設することを願って寄付した多額の資金と、チャールズ・ウイルクス（Charles Wilkes）を隊長とする合衆国最初の大規模調査探険隊の成果を基礎として出来上がったものであった。

（Hinsley, p.17）当時、この全国協会員達は、博物館というものが公衆に対する催物的要素がある程度持ちつつも保存と展示の場と考えていたが、探険組の科学者達は、博物館が恒久的研究調査の基地、つまり探険自体の延長としての研究と収集の場と考えていた。（同, p.19）

b) ワシントン珍物博物館の吸収

かつて博物館とは、世界の珍しい物を集めて展示する場という考え方が主流を占めていたようである。ヨーロッパでは未知の世界各地の珍しい物が集められて展示される時代を経て現代

のような博物館が発達していったと言われる。

（吉田、12-17頁）ヒンズレーによれば、ワシントンの場合もスミソニアンが誕生する前に、鳥の剥製やエジプトのミイラを展示する“ワシントン珍物博物館”（Washington Museum of Curiosities）なるものがあつた。それは1829年にジョン・ヴァーデン（John Varden）が、商業企画として一般人のために開いた“博物館”であつた。しかし科学振興全国協会はこの商売企画の“博物館”を嫌つたようである。恐らく科学の場であるべき博物館をアマチュアがそれと名乗つて商売をやることに我慢できなかつたのであろう。真の科学者とアマチュアまたは仲介的商業的普及者を峻別しなければ気がすまない19世紀的発想の為せる業と著者は言う。当時、科学振興全国協会員は自然界に対して基本的な関心を欠いていたとも指摘されている。

（Hinsley, p.19）詳細は不明だが、ジョン・ヴァーデンは彼の“博物館”から追い出されたうゑに、その収蔵品が本物の博物館に吸収されている。しかも奇妙なことにヴァーデン自身は後に本物の博物館のその部門の管理に雇われているのである。いずれにせよ、この事件がきっかけで、動植物の収蔵と展示が科学者の場である博物館において行なわれるようになったのであれば、大変興味ある事件であつたといえる。

19世紀を通じて、アメリカ・インディアンはアメリカ人類学の主題となつていた。それには、1846年に民族学者ヘンリー・ロー・スクールクラフト（Henry Row Schoolcraft）が、“勇敢、野蛮そして独立心の強い土着人種”の研究を、ルイス・ヘンリー・モーガン（Luis Henry Morgan）らに要請したことがひとつの大きなきっかけとなつたようである。（同 p.20）1846年はまた、ジョセフ・ヘンリー（Joseph Henry）がスミソニアン協会初代会長に選出された年でもあつた。彼は北アメリカにおける人間に関する知識をマウンド遺蹟や遺物の調査・探求を通じて豊かにすことを提案し、実際的かつ理論的観点からして重要な結果を生み出すに違いないのが民族学であり、今後その発達が期待される学問であることを強調したのである。（同 p.30）

今までのコンセプトとは異なるアメリカ・インディアンに特化した国立博物館建設決定を促した背景には、スミソニアン自然史博物館のアメリカ・インディアン研究と資料収集上の実績と、展示される側の彼らの意識の現代的变化と運動の昂揚があったことは疑えないであろう。さらに世界各地の先住民復権運動と文化意識の現代的昂揚も影響を与えたのではないだろうか。

3つのアメリカ・インディアン国立博物館のうち、ニューヨーク・マンハッタン博物館はすでに1994年に完成し一般に公開されている。同博物館の展示はニューヨーク生まれの富豪ジョージ・グスタフ・ハイ (George Gustav Heye) が20世紀初頭に収集したものを主体としており、彼の名前をとってジョージ・グスタフ・ハイ・センターと呼ばれている。ハイは1916年自らの収集品を展示するため、ニューヨークに初めてアメリカ・インディアン博物館を創設したが、1990年にこの博物館がスミソニアン協会の一部になった。次いで、ニューヨークの収蔵品の一部がメリーランド州シュートランドに移管され、それが1998年に設立された文化資源センターの基礎となった。ワシントンのモールに建設中の博物館は、2003年に完成が予定されている。かくして、フィールド博物館やカーネギー博物館などに加え、このスミソニアン傘下の最後のひとつが完成すれば、アメリカ・インディアン文化の展示が量質とも格段と充実することになる。

2001年3月17日と18日に、私はグスタフ・ハイ・センターを訪れた。同センターは、もと税関の建物 (the Alexander Hamilton U.S. Custom House) を引き継ぎ開設されている。荘厳な建物正面入り口の右手の台座には、アメリカとアジア、左手台座には、ヨーロッパとアフリカ出身の女性を象った4つの石像が置かれ、正面外部の多数の円柱はひとつひとつローマ商業神マーキュリーの頭部を象っていて印象的である。この時期は丁度、平原インディアンのシャツ、揺りかご、衣裳、ゲームと工芸品の特別展であった。シャツの遺産は「美、名誉そして伝統」を伝えるもの、揺りかごは「誇りと愛の贈り

物」、そしておもちゃのティピや揺りかご、人形、装身具など子供たちの遊具類は「新生の祖先」という題で紹介されていた。

現在のニューヨークのマンハッタンにあたる土地は、1626年アメリカ・インディアンから僅か60ギルダーでオランダ人に譲渡され、ニューアムステルダムと名付けられたが、1664年、オランダがイギリスとの戦いに敗れ、主人公がイギリス人に代わってからニューヨークと名称が改められた。この時代、この土地にはいろいろな目的でさまざまなインディアンが出入りしていたと伝えられる。ハイが1916年自らの収集品を展示するため、ニューヨークに初めてアメリカ・インディアン博物館を創設し、それを引き継ぐ形でスミソニアン協会がニューヨークにアメリカ・インディアンの博物館建設の場所を選んだことは、アメリカ都市文明を象徴するニューヨークのなかに先住民文化の刻印を押ししたことになる。

この博物館をシカゴのフィールド博物館あるいはピッツバーグのカーネギー博物館と比べた時、どんな特徴があるといえるのか、あるいはどんなキーワードがふさわしいだろうかと考えながら、展示をみて歩いた。開設当初から、協会側はネイティブ・アメリカンと相談しながら博物館の充実を計ったという。具体的には、1991年、諸部族から23人を招き、彼らの意見を容れながら展示物を選定したそうである。

c) 平原インディアンのシャツ

まず平原インディアンのシャツ陳列室がある。同種のシャツが1枚だけ、あるものは数枚ずつ展示されている。あるものはガラス・ケースに入れられ、その展示が美術品の域に高められているという印象を受ける。美の伝統が装飾に生かされていると感じさせる。解説で、部族とおよその年代が分かる。しかし製作者は不明である。製作者が記録されていないのは、それらの大部分が1800年代のもので、恐らく収集の段階ですでに製作者が不明であったり、たとえ名前が分かっていたとしても収集者がそれを重要視しなかったのであろう。動物の皮や布には縫い付けられたやまあらしの刺、ガラスビー

ズ、貝、銅片、動物または人間の毛などが丹念に縫い付けられている。シャツに絵が描かれている場合にはその説明もある。動物の毛はそれが持つ力の信仰を端的に反映している。人間の毛髪は戦士の親族のものであればそれが彼を支え援けることを願って付けられたものであり、敵方の一房の髪は敵に勝る力を持つと信じられていた。

これらのシャツを所有し身に着ける資格が出来るのは、戦闘で最初の武勲をたてた時であった。その武勲は装飾のなかに語られている。多くのシャツが19世紀のものというのは、白人との戦闘が大平原インディアンにとって今までになく困難なものとなり、シャツは戦士の霊を守る保障として製作され着用されたからであると説明されている。この特別展示はその霊的力とシャツ自体の美を強調しているのであろう。

現代これらのシャツは、パウワウの服として、あるいは青年が学問やスポーツですぐれた業績をあげたときに着用されるシャツやジャケットとして用いられている。このような形で19世紀の精神性が受け継がれてきていると解釈されている。室内のジオラマで、ある古老は、今やネイティヴ・アメリカンの新しい戦闘の場は教育であり、戦士のシャツは伝統の力として学業の向上に直結する格好なものとならねばと語っていた。

d) 揺りかご

平原インディアンのシャツの次に、西部海岸地方のバスケットと南西部プエブロの土器の陳列室へと続く。バスケットはすべてガラスケースに入れられている。その陳列室のジオラマに登場するテワ・プエブロの女性は、土器（つば）を手に取りながら、「これは私たちの創造であって、命が通う。どこかに唯一の創造主がいるというのではない。誰でもそれを創り出す能力がある」と説明している。

この部屋を通り抜けると、カイオワとコマンチの格子型揺りかごの展示室となる。実物と写真、家族の系図と揺りかごのパネルなどがある。カイオワとコマンチの間で、揺りかごが交換されていた時代があったという。揺りかご陳

列の単位が家族毎という場合が多いのは、揺りかごは家族の継続性を象徴し、祖母から母へ、さらに娘へと譲り渡されるからであろう。それは命がつながっていくことを意味する。揺りかごに新しい命が誕生する。この取り上げ方は、博物館が過去のものの展示場であるといった世の中の批判を打ち消そうとしているようである。

この陳列室で私の目を引いた写真が何枚かある。そのうちの1枚は、荒寥とした保留区を母親が揺りかごを背負ってとぼとぼと歩く姿であった。これは恰も乗り物以前の時代を象徴しているようであった。他の1枚は幌馬車の輪の中心軸にくくりつけられた揺りかごで、それは乗り物を利用できる時代を象徴するようでもあった。たとえ時代が変わっても彼らは揺りかごを使ってきたことを、この2枚の写真は示そうとしているかの如くであった。

e) モカシン

「平原インディアンの子供たちの美と遊び道具」は、子供たちの成長に合わせた生活具とか遊び道具の展示である。遊び道具は基本的に大人の世界で使用されているものを模倣したもので、幼い時からそれに慣れ親しむことで大人になった時に備えるのであろう。紐でつないだ2つのボール、人形、玩具のティピ、少女の用具ベルト、少年用ダンス・モカシンなどである。その外、大人から子供用まで何百という数のモカシンの展示コーナーがある。展示コーナーのパネルには、平原インディアン出身のマックマスター (Gerald McMaster) が、「モカシンは過去をあらわし、同時にそれは現在へしっかりとつながり、<母なる大地>と結びつく」と書いている。

この部屋のビデオ・スクリーンには、モカシンを履いた人々が輪になって踊る様子が大写しされる。踊る人々のモカシンの右足が上り、次に左足とリズムを持ってステップが踏まれる。マックマスターは、知らない人々の踊りの輪に入っても、一緒に踊るうちに一体感が生まれると言い、多くのモカシンを前にして、彼は奇妙な感情に襲われるがそれはいい感情であるという。

4. 解決を求められている問題

私は展示を一通りみたが、そこにはアメリカ・インディアンに対する白人のステロタイプらしきものは見つけることができなかった。白人文化との関連を示唆するものは、私の気付いたかぎり、幌馬車（写真）、オクラホマのフォートシル・インディアン・スクール（写真）、リザーヴェーション（写真）ぐらいのものであった。それらとても、平原インディアンを巻き込む変化の過程の背景として必要であり、前面に押し出されたものではない。ジオラマの主役もすべてネイティヴ・アメリカンである。変化自体も進化論的図式によって解釈されていない。

しかし、観客がネイティヴ・アメリカンである場合は、この博物館をどうみるであろうか。以下に紹介するのは、BBCの要請に応じて大学に勤める3人のネイティヴ・アメリカンが、この博物館の開館展示で何を聞いたかを述べた要点である。彼らは、第3者である私とは異なり、そのほとんどに対してきびしい目を向けている。ただし、私の見たのは2001年の特別展示であって、彼らの批判は1994年開館時の展示に関してであり、両展示は同じではない。ただしこのことが私とこの3人を分ける大きな違いではないであろう。たとえ同じ展示物をみたとしても、両者を分けるのは、私のようにネイティヴ・アメリカン文化の本質や彼らが白人植民者との関係において直面した問題に疎い傍観者と、3人のような展示される文化の側に立つ者の違いに帰せられる問題であろう。

この3人のうちのパトリシア・ペン・ヒルデンとシャリ・M・ハーンドーフ（Patricia Penn Hilden & Shari M. Huhndorf）の記述からおもな点を以下に拾ってみよう。

まず序文で、この博物館の開館にあたりスミソニアン・ニューズレターその他は、次のような2つの目的があると述べていることを紹介する。

(a) ステロタイプを打ち消す。

(b) これまで口を閉ざされていたネイティヴ・アメリカンに発言の機会を与え、彼らが彼

らの言葉で彼らの物語を語る場所にする。
(Hilden & Huhndorf, p.161-162)

しかし以下のような点が3人によって問題として指摘されている。

総括的に最初に問題を述べれば、かつての植民者が野蛮という他者について描いた夢が内面化され、それが‘我々の’博物館の至る所にあることが自明である。また西欧的なるものが基準になっていることに変わりがない。さらに、われわれに約束されていた先住民の声がどこに聞こえ見られるのだろうか。（同 pp.165-166）

これらの例として指摘されているのは何か、主だったものをあげてみよう。

建物の外観と中央広間について：

まず、壮大な建物の正面両脇に2つづつの像が並べられている。各像は、女性と大陸をあらわしている。どれも実にいやな感じを与える。とりわけ、アメリカ大陸の場合だ。座した女性（インディアン）の膝にはとうもろこしの柄があり、その女性の片足はアステカの像（恐らくケツァルコートル）に置かれている。

正面から建物内部に直進したところが円形広間、8個のエジプト風銅製ランプが示す中央の方形空間、広間中心が卵形の空間、照らされたドーム型の天井はルネッサンス風。その空間を取り囲むフレスコ画壁面は、勝ち誇る合衆国の商業風景、出入りする大型船が船荷の積降ろしをしている様子、手漕ぎのカヌーからインディアンが攻撃を仕掛けようとするが、巨大な船に気押されてしまう様をあらわにしている。だまし絵的效果を發する彫像壁龕がそれらの情景を区切り、壁龕の各々には“発見者”であるコロンブス、ヴェスプッチらが納まっているといった具合だ。（同 p.166）

展示室：

(a) 先住民が雇われ、話の輪のなかに座って観客の質問に答えている。博物館の観客にとって‘本物のインディアン’という訳である。（文化通訳者と呼ばれる）ツアー・ガイドとなる先住民も同じだ。彼らは生味の人間の展示であり、驚いたことだ。（p.165）

(b) ‘言葉のビデオ’と称するビデオ画面に西欧の技術的成果であるラジオ、汽車、車、飛

行機の絵が現われ、それらをインディアンの言葉で表現するとしたらどれがそれにあたるかといったクイズがある。中で音がする箱、‘たばこを吸う子馬’などと書かれている。クイズが当たると、観客は（ラジオや汽車などの）西欧的優越性にも拘らず、何とこれら未開の作品が創造的でまた‘詩的’なんだろうと感心するように仕向けられる。（同 p.166）

西欧と未開のこうした‘相互作用’は何を意味するのか。それは植民地化された住民をより多く取り込むことで、ヨーロッパ人とその子孫の優越をいくらかでも目立たないようにし、過去の遺憾な歴史を変えようとする。これはいわゆる新博物館学の手法なのである。（同 pp.166-167）

「創造の旅路－先住アメリカ人のアイデンティティと信念を示す偉大な作品」展示室：

（a）目立たないコーナーで、自然史博物館にみられる実物大のインディアンのジオラマに突然出くわす。実物大のインディアンの歴史は、1876年フィラデルフィア世界博覧会に遡るが、以来シカゴ博、ニューヨーク市立自然史博物館などで採用され、アメリカの子供たちにインディアンのイメージを与えるものとなった。こうした実物大インディアンはカスパー・マイヤー（Casper Mayer）によって石膏で鑄造されたものが原型になっている。（同 p.173）

3人にとって、土産店も観察の対象である。一階のおもに装飾品を販売する店とは別に、地階に主として子供相手のお土産物売場がある。プラスチックのメイド・イン・チャイナの弓矢とかドラムなど。親たちをも誘い込むインディアン・レシピ、ビデオなどもある。そこで売られる揚げパンは‘本物を経験する’最たるものというわけだろう。実際それがどういう代物なのか分かっているのだろうかと3人は問う。すなわち、条約によって失われた領土、その支払いの一部として支給された小麦粉、ラード、砂糖を入れ過ぎた代物。そのカビ臭さを無くすためインディアンが工夫考案して作ったもの、それが観客にとって、持ち運びできるインディ

アン的‘本物’ということになる。（同 p.177）

この新しい博物館の出来る前のグスタフ・ハイ・アメリカン・インディアン博物館に対して、あるインディアンが20年前批判したが、3人の声もそれと変わらない。要するにこの博物館も白人がインディアンについての幻想に基づいたものが展示されている。そんな博物館は欲しくないというのが3人の結論である。（同 p.178）

私の見た展示は特別展示と銘打つものだけで、常設展示に当たるもの、あるいはこの3人の見た94年の開館時の展示品ではなかったもので、この3人の観察を追体験できなかった。しかしこの3人の批判に耳を傾ける時に、あらためて博物館とは何かということが問われるように思われる。恐らく、誰にも満足のゆく博物館を完成させることは難しいであろう。関係者の間の対話のみが、あるべき博物館の実現を可能にするのであろう。しかも対話の相手は、展示者側と展示される対象者側に限られない。一般の観覧者も色々な意見を持ち、展示の在り方に影響を与えることは、フィールド博物館の場合に言及したところである。また、文化価値を異にする多数の部族が存在する現実、展示の適切性をめぐって部族間の意見の調整が容易でないことも想像される。

おわりに－将来の研究課題

この報告を終わるにあたり、今後の私にとって興味ある2つの課題を述べておきたい。

（a）博物館は収集、保存、研究、展示、公的プログラムにおいて、その役割を果たしていると認識されている。今回は展示の問題を取り上げたが、私の関心からすれば、公的プログラム（あるいは教育と言い換えてもよい）について学ぶべき多くの事柄があるに違いないと考えている。博物館による公的・教育的プログラムは、一般人の文化的思考に大きな影響を及ぼすからである。

（b）アメリカ・インディアンの研究と共にその歴史を歩んできたスミソニアンが、彼らに特化した博物館を建設したのは当然であろう。ス

ミソニアンはアフリカ系アメリカ人の博物館⁶⁾をすでに開館している実績を持っている。これらはエスニック博物館のような性格を持つものではあるが、運営主体がアフリカ系アメリカ人でもネイティブ・アメリカンでもないもので、いわゆるエスニック博物館とは異なる。その基盤はスミソニアンという巨大な組織に加えられて、特定エスニック集団の博物館とはくらべものにならないほど経済的に安定しているであろうし、一般アメリカ人の教育やイメージに与えるその影響ははるかに大きいであろう。

この報告で取り上げたいわば国民的規模の博物館・自然史博物館とは別に、1970年代に全国あちこちの部族保留地に部族経営の部族博物館が出現した。その中には、ピーコット部族博物館のように規模も大きく、調査・研究活動の場ともなり、全国にその情報を発進するようなものもあれば、半砂漠地帯を走る道路沿いに小屋掛けとでも呼べそうな小さな部族博物館もある。これら部族博物館はどのような評価を受けているのであろうか。部族文化の再構成・再評価と継承の役割を果たすのであれば、それはここで紹介したような全国的に有名な博物館の役割を補うものであろう。いずれその内容を考察してみたい。

注

1) シカゴ万国博覧会（コロンブス世界博覧会）

いわゆるシカゴ万国博覧会は、コロンブスのアメリカ発見400周年を記念して開催されたもので、東西南北鉄道交通網の中心であり、100万ドルの保証金を積んだためにシカゴが開催地として選ばれた。当時アメリカではまだ珍しかった電気照明により、夜は「白い都市」となる壮観さであった。

2) Marshall Field (1843-1906)

マサチューセッツ生まれ。1856年シカゴへ。クーリー・ワーズワース乾物卸売会社に勤め、1861年同社支配人兼パートナーとなる。1881年には彼が実質上の所有者となり、マーシャル・フィールド会社と改称する。販売網は中西部一帯に及びイギリス、フランスその他に乾物生産工場を持ち、商品購入事務所を世界中に持ち、シカゴには広さ36エーカーを占めるデパートを運営した。一方、彼はダウントウン・シカゴの開発に力を注いだ。彼はシカゴが教

育・文化の一大センターとなることを望み、関係諸団体（美術協会、シカゴ大学、コロンブス世界博覧会博物館など）に多額の寄付をしたことで知られる。特に、世界博覧会館に深い関心を持ち、さらに彼の遺産はフィールド自然史博物館建設に役立てられた。（The McGraw-Hill Encyclopedia of World Biography, Epaminondas Grunewald 4, p.104, 1973）

- 3) 実はこの返還法以前に、それと関連した条令として、1906年に古代遺物条令（Antiquity Act of 1906）が出され、次いで考古学資源保護条令（Archaeological Resources Protection Act of 1976）、ネイティブ・アメリカン文化保護条令、ネイティブ・アメリカン博物館請求委員会条令、アメリカン・インディアン全国博物館条令（1989）が出されている。これらに共通しているのは、それがどちらの側に立つかは別として、保護を目的とした点であろう。1989年になって、初めてインディアン側の立場が認められ、保護の性質が変化したのではないだろうか。

1990年返還法の内容については、『National Museum of the American Indian Policy Statement on Native American Human Remains and Cultural Materials』

(Museum Anthropology, Vol.15, no.2, pp.25-28.) に紹介されている。

- 4) 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市』（青木書店、1999年）はアメリカ合衆国のみならず、世界諸国の先住民人口の多くが都市住民となっている現状を分析。アメリカについては、同書所収のステュアート・ヘンリ「都市のインディアン」（163-179頁）と青柳清孝「大都市シカゴとインディアン」（213-228頁）を参照願いたい。
- 5) 公法101-185は、時のブッシュ大統領の署名により、スミソニアン協会の下にアメリカ・インディアン国立博物館（National Museum of the American Indian）の設立が認められた。それはワシントンのモール内、ニューヨーク・マンハッタン、メリーランド・シュートランドに建設される3施設を指している。

同公法成立の経緯については、『Report of the Panel for a National Dialogue on Museum/Native American Relations』

(Museum Anthropology, Vol.14, No.1, pp.6-11, February 29, 1990) に紹介されている。

- 6) Anacostia Museumがそれである。フィールド博物館においても、アフリカ関係の常設展示として古代エジプトがあるだけであったが、「アフリカの自然の歴史と人間諸文化」を加える検討が行なわれた。これは、シカゴのアフリカ系アメリカ人が同市の最大

マイノリティ集団であるにもかかわらず、これまで彼らの参観者としての動員数は低調であったことが指摘され、地域における博物館の役割が考えるようになった結果である。この新しい常設展示をアジアやラテン・アメリカなどに先んじて行なうという決定が行なわれたこともアフリカ系住民数が考慮されたあらわれである。博物館側はあらかじめアフリカ系住民向けに一連のフォーラムを開き、彼らが何を欲しているか、何を知りたいのかなどについて情報を得るように努めてきたという。

文献

吉田憲司

1999. 『文化の「発見」』 岩波書店

Kluckhohn, Clyde & Dorothea Leighton

1946. 『The Navaho Indian』

Cambridge, Massachusetts

Prizker, Robert A.

1999. Marston Bates, 『The Nature Of Natural History』

Chicago Field Museum Bulletin No.1989/1990.

Hinsley, Curtis M.

1981. 『The Smithsonian Institute and the American Indian』

Washington & London:

Smithsonian Institute Press

Hilden, Patricia Penn & Shari M. Huhndorf

1999. 『Performing ‘Indian’ in the National

Museum of the American Indian』

Social Identities-Journal for the Study of

Race, Nation and Culture vol.5, number 2,

pp.161-183.

Underhill, Ruth M.

1953. 『Red Man's America』

Chicago: The University of Chicago Press

Groark, Virginia

2000. (April 30)

『Tribal remains stuck in museum limbo』

Chicago Tribune

Museum Anthropology

1990. 『Report of the Panel for a National Dialogue on Museum/Native American Relations』

(Museum Anthropology, Vol.14, No.1,

pp.6-11. February 29, 1990)

Museum Anthropology

『National Museum of the American Indian

Policy Statement on Native American

Human Remains and Cultural Materials』

(Museum Anthropology, Vol.15, No.2, pp.25-28.)

謝辞

この論文の材料を収集するにあたり、京都文教大学海外出張助成金（シカゴ）と同大学院海外研修旅費（ニューヨーク）を与えられた。また現地（ピッツバーグ）では、博物館の案内や解説などで貴重な時間を割いて下さった James B. Richardson III (curator, section of Anthropology, Carnegie Museum of Natural History)、Lisa Mitten (staff, Hallman Library of University of Pittsburgh) の両氏の紹介をはじめ、種々の便宜をはかってくれた Keith Brown (prof. of Anthropology, Univ. of Pittsburgh)、博物館研究について有益な示唆を与えてくれた John Singleton (former prof. of Anthropology, Univ. of Pittsburgh) に感謝したい。